

貴重な機会いただきましてありがとうございます。

地域循環共生をテーマにしたヘルスケアビジネスということでお話をさせていただきます。

合同会社アグリハートの木村と申しますよろしく申し上げます。

まず簡単な自己紹介ですけれども前田さんと同じく、理学療法士という仕事をしています。

ただですねいろいろ仕事の領域が変わっておりまして、ヘルスケア領域全般のアドバイザーということでいろいろと企業さん含めて、他業種の方、多職種の方と手を取り合いながら、いろんなものを作っていくという事業をやっております。

過去にいろいろ厚生労働省さんとか、経産省さんとか、あと埼玉県の振興公社さんとかも一緒にお仕事させていただいたことがあるんですけども、最初の入口はロボットとか ICT とかを使った何かということで、この業界に入らせていただいております。

弊社の簡単な事業ドメインなんですけれども、お話させていただいたようにヘルスケアソリューションの開発支援であったりとか、私自身も病院であったりとか介護施設の事業所運営をしてきた経験から、そういった、施設の運営支援などをしております。

または自治体さんの健康福祉事業の支援ということもやっています。

あとはそうですね地域のヘルスケアビジネスをどうやって作っていくかというところのアクセラレーターというところで立ち位置を、任されることもあったりします。

今日お話ししたいところは二つあるんですけども、一つ目としては、地域循環共生型のヘルスケアビジネスということでお話をさせていただきたいんですけども、なかなか地域循環共生型というのも難しい言葉ではあるんですけども、これをどうやってヘルスケアとくっつけていくかということになります。

そして一つ自分たちの中で出てきた答えとしては、農業、食とか農業とかそういったものと、運動習慣というのはとても親和性が高いことが言われておりますので、そういったものをかけ合わせて、地域の中で循環共生できるような仕組みはないかなということを考えていました。

その中で、まず今、田んぼとか畑とか耕作活動自体、なかなかロボットとかも参入してきていますので、スマート化が可能になってきています。

そういった農業の専門領域を最小化にしつつ、農作業の時だけではなく、その活動自体を見える化、可視化ですね、センサーとかで測定することで、改善効果を見える化していきましょうという取り組みになります。

少し言葉を簡単にお伝えすると、田んぼに行くっていう行動そのものが動機づけになったり、なんか楽しく作業してたらいつの間にかリハビリになってたよねという世界感を実現したいなど考えています。

地域の通いの場の機能として健康コミュニティの形成にも繋がるかなという可能性も持っています。

この辺に関しては前田さんの資料の中でもありましたように、高齢化であったりとか耕作放棄地というのが、地域の中にも出てきていますので、そういった場を有効に活用できるソリューションになるんじゃないかなというふうに期待しています。

ではそれをもう少し掘り下げて具体的に見てみるとどういうことかということ、まずですね健康課題が一つ挙げられます。

例えば今回の新型コロナウイルスの影響で外に出れなくなってしまった高齢者の方シニアの方々。フレイルという言葉があるように、なかなかやっぱり活動量が落ちてきてしまって虚弱症と言われる状態になってる方がたくさんいらっしゃいます。

そういった健康課題が一つあります。

もう一つは農業危機ということで、環境と農業の危機を一緒に解決できるんじゃないかというふうに思っております。

リハビリの分野で言えば、例えば身体活動とかのデータ化であったりとか、ウェアラブルセンサーで作業従事者の工作活動の動きをセンシングしましょうであるとか、あとは定期的な体力測定を行いましょうであったり、AIを使った健康活動アドバイス、またはオンラインでのリハビリの提供などが挙げられます。

次に田んぼの方になってきますと、ICT をうまく活用した圃場の温度管理であったりとか環境管理、あとは水田の用水の管理、そしてドローン技術を応用した、種まきであったりとか刈り入れ、そういったロボティクスを活用しての作業自体を軽作業化、農作業の作業量を軽減していく活動をして

いきたいと思います。

そして、耕作品種と時期を変えることで、既存農家さんの負担を軽減できるのではないかなど考えています。

ここで何をやるかというところなんですけれども、一つはですね、お米がプラスチック原料になる会社さんと今事業提携をしまして進めています。

まず、地域の中にいらっしゃる医療、福祉、介護施設の方々、または農業が好きですよっていう方であったりとか子供たち、そういった方々がそういう地域の田んぼ、耕作放棄地であったりとか、休耕田を健康田んぼみたいな形で名前を変えてやります。

そこで獲られた田んぼのお米ですね、お米をプラスチックにする技術を持っているバイオマスレジソ社さんと一緒に活動しておりますので、自分たちで作った米がプラスチックに生まれ変わって環境にもやさしい、そして自分たちも使える。

そこで自治体の中で自分たちのエコシステムを回せるというような仕組みを考えています。こちらちょっと紹介になるんですけれどもスポーツというコンテンツということでお題をいただいておりますのでスポーツとの組み合わせの例なんですけど、すいませんこれ他県で、神奈川県なんですけれども、湘南ベルマーレさんとライスレジソさんが、一緒に取り組みをした1例になります。

これは例えばフードパークってあるんですけれども要するにスタジアムの周りで売られてる食品とか食べ物とかですね、それらのカトラリー、スプーンとかフォークとかを、こういう米で作られたプラスチック製品に変えていきたいと思いますという、取り組みの1例になります。

二つ目としては中小企業さんと、お米づくり、スポーツという感じなんですけれども、中小企業さんがSDGsもしくはESGの一環で、福利厚生事業として田んぼづくりを取り組むということも、もうすでに始められています。

こちらは新潟県での田んぼになります。

参考資料なんですけれども、政府の方で令和4年、去年ですね、プラスチックに関わる資源循環の促進等に関する法律というのが制定されました。

その中の12品目のうちプラスチックの米でできた何か、というのにもうすでにたくさんの商品が置き換えられています。おもちゃであったりとかレジ袋、指定ゴミ袋、お箸、クリアファイルいろんなも

のが製品として今世の中に出回ってきています。

一つ目はそういった形で「お米づくりをスポーツの方々と一緒にやっとう」、で「できたものをスポーツの現場の方々と一緒に使おうよ」というようなニュアンスの仕組みになります。

二つ目ですけれども、今度私自身が病院のアドバイザー等もしていますので、地域医療機関が住民と共催する運動習慣獲得プログラムというのを紹介させていただきます。

コンテンツとしてはインターバル速歩というものになるんですけれども、これはどういうことかという、信州大学の先生が考えられたんですけれども、3分間早歩きをして、そのあとゆっくり歩きを3分間行う。これが1セットです。

これを交互に5回ぐらい繰り返すスポーツ、運動になります。

実際これをやるとですねなかなかきつくてですね心拍数も120とか結構上がっちゃったりするんですけどもしっかりとやると、運動、スポーツになるのかなと考えられます。

ここでは籠原病院という埼玉県熊谷市にあります、籠原病院で「いきいきすこやかプロジェクト」という中の一環としてやらしていただいている、籠原体育館という普通の町にある体育館を半日借りて、地域の住民の方を招いて、スタッフとかが一緒になりながらやっています。

で、検査の項目等も結構絞ってまして、左上の写真にあるように、きちんと採血をして、体の中の状態を定期的にモニタリングしようということですか、あとは体力測定も毎回きちんと行うようにしています。

内容としては身体測定をやった後にバイタル測定をしてDHEAホルモンというのがあるんですけども、それを希望者のみ採血をしてその経過を追うようなことをしています。

あとは体力測定ですね、筋力であったり、柔軟性バランス歩行といったパラメーターを定期的に図るようにしています。そして、実際にインターバル速歩します。

こちらの取り組みですけれども、昨年からは開始しまして3ヶ月おきに計測会を実施しておりまして、地域住民だけではなくての外来の患者さんとかも参加できるようになってきました。

あと自治体の方ですとか市議会議員さんとかも参加していただいています。

会場内にはですねちょっと栄養のことも絡めないといけないねということで、病院の栄養課の方から管理栄養士が参加してしまして、健康的に過ごすための食事と栄養指導というブースも設置して、適宜相談に乗っているというような感じになります。

こちらの方なんですけども次回がですね実は明後日なんです。

2月18日2時から籠原体育館にて開催ということで、もしご興味のある方いらっしゃいましたら当日いきなり参加でも大丈夫ですのでお越しただければと思います。

私の方からは以上となります。

ご清聴ありがとうございました。